

付録4 卒業論文・修士論文(研究成果報告書)作成マニュアル

大学院経済学院・経済学部

卒業論文および修士論文・研究成果報告書の作成にあたっては、以下の事項に注意すること。

1. 用紙は、原則として、**A4サイズの白紙**を使用すること。
ただし、図表については例外を認める。
2. 原稿は、ワープロソフト・ワープロで作成・印刷することが望ましいが、手書きでも可とする。
 - ・ワープロソフト等を使用する場合は、明朝体11ポイント前後で、1ページ当たり1000字程度(35字×30行)を目安とする。
 - ・A4用紙(白紙)に印字する場合には、用紙の上下左右に3cm程度の余白を設けること。
なお、感熱紙等、インクの消えるおそれのある印字方法を用いないこと。
 - ・手書き部分は、必ずインクで清書すること。鉛筆は、保管中に消えてしまう恐れがあるため不可とする。
3. 分量について
 - ・卒業論文：指導教員の指導を受けること。とくに指示のない場合は、30,000字程度(図表や注を含む)を目安に執筆すること。
 - ・修士論文(研究成果報告書)：特に制限を設けてはいないが、指導教員の指導を受けること。
4. 論文には必ず**表紙をつける**こと。表紙には、下図に従い、論文題目、所属学科(修士論文の場合は、専攻およびコース)、学生番号、氏名ならびに所属ゼミを明記すること。
また、論文は必ず**製本すること**(ホチキスやクリップ留めは不可)。

<表紙>

令和〇〇年度
論文題目
学科名または専攻・専修コース名
学生番号
氏名(所属ゼミ名)

※末尾体裁参照。

製本は、表紙・ページが離脱したり折れ曲がったりしない方法によること。

例)

- ・簡易製本機等を用い、本体の背を接着剤などで固定する。(文具店・生協などの製本サービスを利用する場合。)
 - ・本体2箇所以上に穴を開け、綴込表紙(黒表紙)2枚で挟み、それらに綴じひもを通してしっかりと綴じる。
5. (1) 論文には必ず**要旨をつける**こと。
卒業論文の要旨の長さは任意とするが、A4サイズの用紙1ページ以内に収めること。修士論文・研究成果報告書要旨の長さはA4サイズの用紙2ページ以内とする。
製本の際、要旨は、**表紙の次のページ(目次の前)**に配置すること。

(2) **本文の前(要旨の次のページ)に必ず目次をつける**こと。目次には、章、節などのページを付記することが望ましい。

6. 本文中で、他の文献や資料の記述を引用したときや参照したときは、注などの形で**必ず出典を明らかにすること**。出典を明記しない場合は不正行為とみなされ、北海道大学通則第31条又は大学院通則第26条の懲戒処分の対象となることがある。

記載方法としては、次のような形式がある。

(1) 本文中に次のように記載し、巻末に引用文献・参考文献の一覧を掲載する。

(→ 8. 参照。)

大泉準一郎[2002](p.35)によると、「いま構造改革を断行しなければ、わが国に未来はない」。

または、

政治学者の代表的な見解は、「いま構造改革を断行しなければ、わが国に未来はない」(大泉準一郎[2002] p.35) というものであった。

(2) 「注」番号を付け、脚注欄や章・節の終わり、あるいは巻末に引用文献および引用ページを記載する。(→ 8. 参照。)

・・・その分析結果から、「いま構造改革を断行しなければ、わが国に未来はない」⁽¹⁾ という主張が根拠のないものであることがわかる。

(3) 次のように、本文中に直接『書名』や出版社名などを記載する。

権威ある経済学者の予測では、「いま構造改革を断行しなければ、わが国に未来はない」(大泉準一郎『構造改革なくして未来はない!』郵民社、2002年、p.35) のであり、それを妨げる抵抗勢力は・・・。

(4) インターネットで入手した文献・資料の場合、上記(1)～(3)に準じて記述し、末尾に入手先のURLを記述する。この種の情報は、サーバーの停止などにより、後日参照できなくなることがあるので、参照日を記述しておくことが望ましい。

<http://www.>、(参照2013-04-01)

※ 出典を明記するだけでなく、引用方法にも注意を払い、出典の文を安易に転用しないこと。例えば、出典の文を「 」を用いないで使用したり、あるいは、英語で書かれた論文の一部を翻訳だけしてそのまま使用したりしないこと。

7. 図表についても、他の文献・資料などから転載した場合には、同様の形式で**必ず出典を明記すること**。

文献・資料に記載されているデータなどから自分でデータを作成した場合も、基になったデータなどの出所を必ず記載すること。

8. 引用・参考文献の著者名や書名などの表示方法の例を示す。

(1) 著書

(邦文文献) 大泉準一郎[2002]『構造改革なくして未来はない!』郵民社。

(外国語文献) Junichiro Oizumi[2002], *No Future without Disorganization!*, Yuminsha.

(→上記6.(1)に対応する表示方法)

または、

(邦文文献) 大泉準一郎著『構造改革なくして未来はない!』郵民社、2002年、p.35。

(外国語文献) Junichiro Oizumi, *No Future without Disorganization*, Yuminsha, 2002, p.35.

(→上記6.(2)に対応する表示方法)

(2) 論文

(邦文文献) 竹内平三[2002]「経済学とはそういうことだった」『経済会議』第21巻第1号、pp.1-10。

(外国語文献) Heizo Takeuchi[2002], “That’s Economics”, *Economic Meeting*, Vol.21, No.1, pp.1-10.

(→上記6.(1)に対応する表示方法)

または、

(邦文文献) 竹内平三「経済学とはそういうことだった」『経済会議』第21巻第1号、2002年、p.8。

(外国語文献) Heizo Takeuchi, “That’s Economics”, *Economic Meeting*, Vol.21, No.1, 2002, p.8.

※ 必要に応じて掲載誌名の後ろに発行者名を入れる。

例) 『経済会議』(南国大学)第21巻第1号、・・・

(→上記6.(2)に対応する表示方法)

※出典の表示も文なので、末尾に「句点」か「ピリオド」をつけるのが原則である。

9. 論文を作成するのに参考となる文献を数冊紹介しておくが、他にも多くの著作が出版されている。自分にあったものを自分で見つけてほしい。

①吉田健正『大学生と大学院生のためのレポート・論文の書き方』ナカニシヤ出版、1997年。

(コメント) 文章は多少堅めでとっつきにくいだが、標準的な内容。

②河野哲也『レポート・論文の書き方入門 第3版』慶應義塾大学出版会、2002年。

(コメント) ①よりも分かりやすいが、その分著者の考えを断定的に押し付けているようなところが見られる。

③木下是雄『レポートの組み立て方』ちくま学芸文庫、1994年。

(コメント) ベストセラー『理科系の作文技術』(中公新書)の著者が、文系学生向けに書いたもの。形式面についてはやや不満。

④山内志朗『ぎりぎり合格への論文マニュアル』平凡社新書、2001年。

(コメント) とにかく面白く読めるが、ちょっと砕けすぎか。形式面への指示は詳しいが、散在している。

10. 分野によっては記述の仕方が決まっていることがあるので、指導教員の指示を仰ぐこと。その他の不明の点についても、指導教員の指導を受けること。

11. 提出は製本したものを、学部卒業論文については1部、修士論文については3部、修士課程研究成果報告書については1部を、定められた期日までに経済学院・経済学部教務担当窓口へ提出すること。

12. 表紙の見本は、経済学院・経済学部ホームページを参照すること。

http://www.econ.hokudai.ac.jp/s_affairs/s_guidance

令和〇〇年度
北海道大学経済学部 卒業論文

1990年代以降の東アジア経済圏の成長と
わが国中小企業の競争力
—技術開発力の視点から—



(●●ゼミ)
経済学科 01000000
経済太郎

令和〇〇年度
北海道大学大学院経済学院
修士論文

1990年代以降の東アジア経済圏の成長と
わが国中小企業の競争力
—技術開発力の視点から—



(●●ゼミ)
現代経済経営専攻
17003000
経済太郎



令和〇〇年度
北海道大学大学院経済学院
研究成果報告書



1990年代以降の東アジア経済圏の成長と
わが国中小企業の競争力
—技術開発力の視点から—

(●●ゼミ)
現代経済経営専攻
(経済政策コース)
17003000
経済太郎

表紙のデザインは自由ですが、「論文題目」と「名前」の位置は変更しないでください。